看護の心をみんなの心に
5月12日は
看護の日

30th anniversary

Nursing now

第10回
「忘れられない看護エピソード」集

2020年「看護の日・看護週間」

生きるを、ともに、つくる。

公益社団法人 日本看護協会

はじめに

5月12日は「看護の日」です。
近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなんで1990年に制定され、ことし30周年を迎えました。
毎年、この日を中心に、厚生労働省と日本看護協会は「看護の心をみんなの心に」をメインテーマとして、全国各地でさまざまな事業を行っています。2020年はナイチンゲールの生誕200年の年でもあり、世界的に「Nursing Nowキャンペーン」が展開されています。

この記念すべき年に、第10回を数える「忘れられない看護エピソード」は、看護職部門・一般部門に加えてNursing Now部門を新たに設け、皆さまからたくさんのご応募をいただきました。
エピソード集には、2,702通の応募の中から、特別審査員の内館牧子さん（脚本家）やゲスト審査員の荻野目洋子さん（歌手、女優）らにより選ばれた21作品を収録しています。

ケガや病気で入院したり、ご家族に付き添ったり。患者さんやご家族にとっても、看護にあたる看護職にとっても、心に残り、ずっと人生を支えてくれるような看護体験があります。
その後の人生を生きていく糧となるような、忘れられない言葉をもらうこともあります。看護は、人生を変えることだってあるのです。

さまざまな節目が重なるこの年に、看護にまつわるエピソードが、人の温かさや思いやりの心をあらためて分かち合い、明日を生きていく力を生み出すきっかけになれば幸いです。

公益社団法人　日本看護協会

もくじ

最優秀賞

看護職部門

3　その声は

一般部門

4　今も元気に出してます

内館牧子賞

看護職部門

5　ハル子ちゃんのおにぎり

一般部門

6　看護師として

優 秀 賞

看護職部門

7　つなぐ命

8　「いっ、て」

9　白い看護師　黒い看護師

一般部門

10　看護師の〝気付き〟

11　仕事という名の愛に感謝

12　2年越しの思い

入 選

看護職部門

13　次いつ来るの?

14　母と子の時間

15　爪切り

16　奇跡が起こるかもしれない

17　絆創膏

一般部門

18　魔法の言葉「かんごしききます」

19　やさしさ

20　救ってくれ　ありがとう

21　心を健康にしてくれた看護学生さんへ

22　おめでとうの本当の意味

23　Nursing Nowキャンペーンについて
Nursing Now賞【講評】

24　Nursing Now賞
セルフケア看護の実践によるハピネス

25　Nursing Now賞【解説】
「Nursing Now_いま私にできること」

※本書に収録したエピソードの中には、今日の医療倫理、医療の安全の観点からすると、ふさわしくないとも思われる記述や表現がありますが、それぞれの方が経験した当時の状況や時代背景にかんがみ、そのままとしました。

看護の心をみんなの心に
5月12日は
看護の日

30th anniversary

2020年「看護の日・看護週間」特別連続ドラマを制作!

日本看護協会では「看護の日・看護週間」制定30周年を記念して、「忘れられない看護エピソード」受賞作品を基にした特別ドラマを、BS日テレで制作・放映予定です。
詳細は今後、本会HPでお知らせします。

【放送日時】2020年秋～(全26回)　毎週日曜 20:54～21:00(予定)

看護職部門
最優秀賞

その声は

【佐賀県】齋藤泰臣　43歳

「病院まで遠いよ。最期の会話になるかもしれない」「そんなことない。間に合う」と小声で言い争う男女の声が、師走の電車に揺られていた私の耳に入ってきた。聞き耳を立てるつもりはなかったが、切羽詰まった男女のやり取りと内容が気になった。

夫婦と思しき2人は、携帯電話をのぞき込み会話を続けていた。「電話したほうが良いよ」「いや、人の迷惑になる。駅に着いてからでいい」。他の乗客も気になるのか、2人に視線を向けていた。「意識なくても耳は聞こえるって。掛けなさいよ。お義父さん、待っているよ」「電車内だから掛けられないよ」。お互いに感情が高ぶり、少しずつ声が大きくなっていた。携帯電話の向こう側で、息を引き取ろうとしている父親がいて、臨終の場に間に合わない状況にあるということは、その場の誰しもが理解できた。

緩和ケア病棟に勤務する私にとっては、静観できない場面であった。病棟では家族から患者への最期の声掛けを、後悔がないように気持ちを伝えることを促してきた。躊躇いながらも席を立ち、2人に近付こうかとした時、「電話、掛けたほうがいいですよ」と2人の正面に座っていた女性が声を掛けた。近くにいた乗客も見守りながら頷いている。背中を押されたように男性が電話を掛ける。「お袋、親父の耳元に携帯電話を置いてくれ」。電車内に声が響く。「親父、親父が一生懸命働いてくれたから、俺たちは腹一杯に飯が食えて、少しもひもじい思いしなかったよ。心配しないでいいから。本当に、本当にありがとう」。静まり返る電車内で嗚咽を懸命に抑える男性。苦情を言う者などいもしなかった。

2人は何度も乗客に頭を下げながら、目的の駅で降りていった。電車内に師走の喧騒と冷気が入り込む。しかし、言葉にはできない胸の温かさを私は感じていた。あの場にいた誰もが、まさに「看護」をしていた。そして誰もが胸の温かさと同様に感じていただろう、「その声は届いている」と。

一般部門
最優秀賞

今も元気に出してます

【大阪府】新田（にった）剛志（つよし）　40歳

あの日を一生忘れません。すごく寒くて、お天気が良くて、そして夕日が本当に綺麗な日でした。ただその前の1カ月ほどは眠れず、食事も摂（と）っておらず、心も病んでいました。

私は勤務先の会社でトラブルを起こしてしまい、その日は人事部長と面談することになっていました。会社が関係を別（わか）つことを告げるために設けられた会合でした。

とあるホテルでの会合を終え、会社への帰路につきました。社会人としての全てを否定され、経験の浅い私は、存在そのものを否定されてしまったと受け止めてしまいました。状況を受け入れるには経験が少なすぎ、考えは悪い方にしか向かず、家族に対して果たすべき責任の取り方も、自分の命を引き換えにする以外に思い浮かばなくなっていました。

会社がある駅についても会社へは足が向かわず、駅のトイレでは何を考えても涙が止まりませんでした。

重い足を引きずり、構内を出て、駅前の広場を通ると、献血バスが目に入りました。過去に何度か経験があったため、逃げ込むように献血バスに行きました。

簡単な手続きをして、採血のために利き腕を差し出した際、担当してくれた看護師さんが「とても立派な血管ですねぇ、採血がしやすいです」と褒（ほ）めてくださいました。私がそんなに採血しやすいですか？と尋ねると「すごい勢いで出ています。濃さもしっかりしていて本当にありがたいですね。こんな血管を持っている人がたくさんいると助かりますね」とまた褒（ほ）めてくださいました。零（こぼ）れ落ちそうな涙を必死にこらえ、看護師さんに別れを告げ、バスを出ました。

空にはびっくりするほど綺麗な夕日が見えました。

あの時の看護師さん！　本当にありがとうございます。あなたが血管と血液を、私の存在を褒（ほ）めてくださったおかげで、今も元気に生きています。献血は50回を超えましたよ、先日は骨髄バンクドナーとして、骨髄提供もしました。看護師さん本当にありがとう！　あなたは命の恩人です！　今も元気に出してますよ！

看護職部門
内館牧子賞

ハル子ちゃんのおにぎり

【埼玉県】久保（くぼ）百香（ゆか）　56歳

おにぎりは三角形と決めている。

35年以上も前の話である。看護学校を卒業し、初めて配属されたのは小児病棟だった。可愛い子どもたち相手なら毎日楽しく仕事ができるだろうと希望した部署だったが、新人ナースの日々はそんな甘いものではなかった。覚えることが山のようにある上、子どもたちはすぐに嫌々をするし、泣き叫ぶし、思ったように動いてくれない。そんな患児とどう接していいか分からず、辞めようと思ったこともあった。痛い検査や治療で、本当に辛いのは子どもたちのほうだったのに。

その日、私はハル子ちゃんの担当だった。2歳で小児がんを発症し、今回何度目かの抗がん剤治療で入院していた。顔見知りの先輩ナースや先生たちとは打ち解けていたが、新入りの私にはなかなか懐いてくれなかった。

お昼の時間になり、私は抗がん剤の副作用で食欲のないハル子ちゃんに少しでも食べてもらおうといろいろ努力してみたが、横を向かれてしまった。どうしていいのか分からず、諦めて下膳しようとした時、「かんごふさん、おにぎりつくれる？」「さんかくだよ」と、小さな声でハル子ちゃんが私に話し掛けてきた。「ごめんね。かんごふさん、三角おにぎり作れないんだ」。

情けない気持ちで正直に話すと、「じゃあ、おしえてあげるね」と、ハル子ちゃんはそう言ってくれた。

「ふたつの手をおやまのかたちにして、その手でごはんをにぎったら、お手々の中でクルッてまわすの」

小さい手で一生懸命教えてくれるハル子ちゃんに感動しながら、私は精一杯おにぎりを握った。人生初の三角おにぎりは、少しゆがんでいたが、「かんごふさん、じょうずにできたね」。

ハル子ちゃんは、天使のような微笑（ほほえ）みでそう褒（ほ）めてくれた。

あの日から、くじけそうになった時あの光景を思い出す。そして、ときどきハル子ちゃんにこう話し掛ける。

「ハル子ちゃん、もう一かいさんかくおにぎりのつくりかた、おしえてほしいな」

一般部門
内館牧子賞

看護師として

【東京都】池田（いけだ） 幸生（ゆきお） 58歳

私は、自衛官として30数年間を勤務して来ましたが、その間に東日本大震災を経験しました。その当時、学校教官として看護師のクラスを受け持っていました。教え子の一人は、学校を卒業して仙台に勤務になりましたが、そのときに東日本大震災が起こりました。当時彼女は、自衛隊病院に勤務しておりました。夜勤明けで自宅に小学校1年の息子といたところを被災しました。ガラスが割れ、食器が落ち、壁にヒビが入り、電気、ガス、水道が止まりました。泣きわめく息子をなだめている時に、病院から非常呼集の連絡がありました。病院に出動する要請でした。彼女が着替えていると、息子が足にしがみ付いて来ました。

「お母さん！　お母さん！　行かないで！　行かないで！　1人にしないで!!」と泣きじゃくります。

普段はこんなに泣く子ではないのに……。

「お母さんは看護師で、自衛官なの。だからどうしても行かなきゃいけない。皆を助けなきゃいけないの！」

何度も何度も息子に説明しているうちに、自分でも涙が止まらなくなりました。

「自分の息子さえ守れないのに、他人が守れるの？」。そんな言葉さえ浮かびました。

それでも！　それでも！　歯を食いしばって、彼女は息子に言い聞かせました。

「人を助けるのがお母さんの使命なのよ！　あなたも自衛官の息子で、看護師の息子でしょう！　理解しなさい！　耐えなさい！」

息子は体を振るわせて、涙を流しながら、返事をしたそうです。

「うん……。分かった。僕（ぼく）、待ってるよ……」

あれから8年が過ぎました。

「そんなことあったっけ？」

息子はこの話をすると、上の空で、彼女の顔を見るそうです。

看護職部門
優秀賞

つなぐ命

【栃木県】野澤（のざわ）美枝子（みえこ）　52歳

脳出血で倒れたAさん50代は、人工呼吸器で何とか命をつないでいた。Aさんの容体が悪化していく中、妻は医師に告げた。「先生。夫は臓器提供を望んでいました。夫の誕生日に一緒に署名したんです。最後の望みを叶えてください」と。

ほどなく脳死判定が行われ、医師からAさんの法的死亡が宣告された。妻の気持ちを思うと涙が溢（あふ）れ、ただそばで見守るだけだった。最後の夜、ベッドを並べ互いの顔が見えるようにベッド柵を下ろした。妻は、Aさんの手を握り何度も顔を見つめそっと話し掛けながら夜を明かした。やさしげな表情で「もう死んでいるのに、心臓が動いているなんて不思議な感覚なんですよ……」と話した。私は、その言葉に返す言葉が見つからず「生きてますよ……」、それだけを伝えた。すると、妻は天井を見上げ「そうですよね。夫は、天国から見てくれていると思うの」とつぶやいた。

空が白み始めた頃、手術室に向かった。妻はAさんの手をさすりながら「もう少しだけ頑張って。もう少し」とやさしく声を掛け、ドアが閉まるその瞬間まで見送った。

手術を終えAさんが戻ってきた。その姿は、微笑（ほほえ）んでいるような、何とも言えないとても穏やかな表情だった。妻は「がんばったね」、そう言うと涙が溢（あふ）れAさんの胸に顔を埋（うず）めた。

2人だけの時間を静かに過ごしていた。そのとき、Aさんの心臓が他の人の体で動き出したと連絡が入った。「良かった。本当に良かった」。妻の顔は一瞬で笑顔に満ちた。妻だけでなく関わったすべての人の心に一筋の光が放たれた瞬間だった。「ありがとうございました。Aの望みを皆さんが叶えてくれました。命をつないでくれた皆さんに感謝します」。そう言って自宅に帰った。

悲しみの中にも救われる命、つながる命。人が人を救う素晴らしさ、命のバトンの大切さを教えてくれたAさんと家族に心から伝えたい。「ありがとう。2人のつながった心はずっと生き続けていきますよ」。

看護職部門
優秀賞

「いっ、て」

【東京都】成田（なりた） 裕子（ゆうこ） 60歳

「今日は61（ロクイチ）の担当か……」。小児病棟に配属されて5年目。私も手術後の赤ちゃんや小児がんのお子さんの病室を担当するようになった。

461号室はナースステーションに近い個室で、白血病の8歳のリサちゃん（仮名）が入院していた。2年にわたり、辛くて苦しい抗がん剤の治療を健気（けなげ）に続けてきたが、リサちゃんの病状は悪化の一途だった。日ごとに衰弱していくリサちゃんに、私は「つらいね、いたいよね」と、体をさするくらいしかできず、辛い治療に加担してきたような後ろめたさを感じていた。「嫌われても仕方ない」と思っていた。

せっかくのママとの時間を邪魔しないよう、私が検温や点滴の確認を急いで済ませて病室を出ようとした時、リサちゃんがか弱い声で「いっ、て」と言った。私は「早く、あっちに行って！」と言われたと思い、「分かってるよ、すぐ行くね」と答えた。するとリサちゃんはもう一度「いっ、て」と、私を見つめた。

私は自分の間違いに気が付いた。恥ずかしかった。リサちゃんが力をふり絞って「かんごふさん、ここに、いて！」と訴えているのに、「あっちに、いって」と思いこんだ。看護婦失格だと思った。

間もなく、リサちゃんの意識はなくなり、私はきちんと謝ることもできなかった。

あれから35年、それでも私は子どもたちのそばで、看護師を続けている。私をこの職業に引き留めてくれたのは、ユーモアあふれる魅力的な同僚と上司、看護学校の同級生との絆、そして一緒に遊んでくれる子どもたちの笑顔。日々、感謝している。

看護師は、患者さんや子どもたちのそばにいることを許された職業だと思う。そばにいてこそ、相手のサインを正しく受けとめ、気持ちを読み取れる。

今でもリサちゃんの「いっ、て」は忘れられない。リサちゃんや多くの子どもたちとご家族から学んだ大切なことを胸に、新しい出会いの中でも活（い）かしていきたいと思う。

看護職部門
優秀賞

白い看護師　黒い看護師

【愛媛県】大野（おおの）　裕子（ゆうこ）　59歳

Yさんは糖尿病。軽度の認知症はあったが、インスリンの自己注射は可能。しかし、在宅療養は困難なため、私が勤める施設へ入所となった。

不安があり、「看護師さん、聞いてください」とたびたび呼び止められる。「間食もしてないのに血糖値が上がっとる」「足がピリピリする」「ひもじいていかん」。毎日同じことを繰り返し訴える。

（ああ、またか――）

顔だけ向けて「昨日も言ったでしょ!!」と体と心はそっぽを向いて業務に追われていた。

ある日、カーテンの奥の備品庫にいると前の廊下からYさんの声がした。他の入所者数人と話されていて、「白い看護師さんはよう話聞いてくれるけど、黒い看護師さんはいつも走り回ってどっかに行ってしまう」と。

「はっ!?　看護師?　白い?　黒い?　私のこと?」。施設なので白衣は着ていない。ポロシャツとジャージだ。確かに私は色黒で、比べて同僚はやや色白かもしれない。外見のことを言っているのだろうか。それとも、白イコール優しい白衣の天使、黒イコール悪魔とか?　Yさんには私がどう見えているのだろう。

カーテンの奥で思考が渦巻き、お腹のあたりがふつふつムズムズしてきた。「ハイ!!　私が黒い看護師です!」といきなり出て行ってやろうか。息をひそめてカーテンを握り締めていた。

翌日も「看護師さん教えて下さい」と私を追ってくるYさんの姿に、いとおしさと申し訳なさが入り混じった感情を覚えた。人として正面から向き合わない自分を恥じ、頼ってくれるYさんの気持ちをくみ取れなかったことを反省した。

「黒い看護師」は、自分への戒（いま）めの言葉としていつも心の隅っこに置いている。単に色黒だからそう言ったにすぎないかもしれない。認知症が進行したYさんに確認はできないが、ナースの原点である白衣の天使の精神を忘れずに、日々努めていこうと思っている。

一般部門
優秀賞

看護師の〝気付き〟

【千葉県】稲村（いなむら） 歩美（あゆみ） 20歳

「これからよろしくお願いします」。慢性腎臓病を患った私は検査・治療のために入院をすることになりました。専門の小児科病棟であったため、似たような疾患を持つ小児が入院していました。約4カ月という、当時は途方にくれそうになった入院期間。緊張から挨拶（あいさつ）も表情もかたくなってしまった私に、先に入院していた子たちは入院生活について教えてくれたり、遊びに誘ってくれたりして、私はすぐに溶け込むことができたのです。

少しずつ運動の許可が出始めて、すぐ傍（そば）にある特別支援学校に通いながら入院生活を満喫していた頃。なぜかだんだんと入院していた子たちに無視をされるようになりました。多床室であり、気まずさから一日中カーテンを閉め切って過ごしました。週末は家に外泊できたものの治療のためには入院を続けるしかないし、最初に陰口を叩き無視を始めた子は年下で、両親の面会が少ないことからストレスを感じているのかもしれない。そう思った私は仕方がないことなのだ、と両親や病院のスタッフに相談をすることはありませんでした。

それから数日後のことです。皆が他の病室に遊びに行き、私が一人ベッドで過ごしていた時、受け持ちの看護師さんが病室を訪れました。今日は採血や洗髪をしてもらうような予定はないはずだからどうしたのだろう、と考えていたら看護師さんはベッドの脇にしゃがんで目線を合わせて「大丈夫？　辛いよね」と、私の手をそっと握ったのです。びっくりして、すぐに言葉を返すことができませんでした。それでも看護師さんは「私たちがいるよ。なんでも言ってね」とおっしゃいました。

あれから10年。私は看護学生になり、国家試験を目前に控えています。看護師さんの手のあたたかさが、今でも忘れられません。あのときの私の辛い状況に気付いてくださった看護師さんのように〝気付き〟を大切にし、心身ともに患者さんを支えられるような看護師を目指したいと思っています。

一般部門
優秀賞

仕事という名の愛に感謝

【大阪府】西田 恵子 51歳

無菌室の清浄度（クラス）が下がった日の午後。足浴と清拭セットをのせたワゴンを押して看護師のKさんが入ってきた。予定にないはず……と戸惑う私をよそに、「いいのいいの。今日私がしたいと思っていたことだから」と用意を始めた。

「はい、足入れて」お湯でふやけた垢まみれの指一本一本まできれいにし、「気持ちいいでしょ！次は体ね」と熱めのタオルで丁寧に何度も拭いてくれた。

「無菌室を出られる日も近いよ。いつも明るく前向きな西田さんがいないと寂しいって病棟のみんなが言ってるよ。長い間本当によく頑張ってきたね。ホント、よく頑張ったよ」

少し間があき、背中を撫でながら耳元で、

「泣いていいよ」

と言った。そのとたん、涙があふれて止まらなかった。私は声をあげて泣いた。

無菌室ではいつもの「キャラ」もどこへやら。想像以上の過酷さにこれは治療なのかと思うこともたびたびあった。ベッドに沈み天井を見つめ、ただ時間がすぎるのを待つ夜中、そっと手を握ってくれたのは彼女たち看護師だった。やっと飲んだ薬を嘔吐した時、一緒に吐しゃ物を見て薬を見つけることまでしてくれた。「ごめんね」と謝る私にそういう時は必ず「仕事だからいいのよ」と答えた。ビニールカーテン越しに彼女たちの気配を感じるだけでホッとすることができた。

私頑張ったんだ。共に闘ってくれた看護師さんの言葉に胸が熱くなった。妊娠半年でがん告知を受けてから、ただ前を見て走り続けてきたこの8カ月。これからの生活を思い今泣かせてくれたんだと思った。退院の日、「またあなたに会いたいと思うけれど、それはここへ戻ってくるってことだから、会わないことを心から願っている。大丈夫。焦らずに頑張って」。そう言って見送ってくれた。

あれから25年。

「会いたいなぁ」

一般部門
優秀賞

2年越しの思い

【佐賀県】坂井（さかい） 祐子（ゆうこ） 36歳

私は1人目の子どもを妊娠8カ月の時、常位胎盤早期剥離で亡くした。救急車で病院に運ばれたが、赤ちゃんの心音は戻ることはなかった。死産だった。

突然の悲しみから2年後、妊娠したことが分かった。2年ぶりの病院。不安のほうが大きかった。個室に呼ばれ「こんにちは」と声がして見上げるとそこには私をうれしそうに見つめる人がいた。最初の入院の時に担当してくれた看護師さんだった。その看護師さんは毎回「順調だね、何かあったらすぐ教えてね」と笑顔で声を掛けてくれた。不安な気持ちが大きくなり泣いてしまう私にずっと背中をさすって話を聞いてくれた。

そして無事に男の子を出産。退院後の1カ月検診も問題なく終わり帰りに看護師さんに今までの感謝を伝えると「……あのね、2年前の入院の時、最後に亡くなった赤ちゃんの体を拭いて体重を測ったりするのは私の担当だったの。それで準備が終わってお父さんに赤ちゃんを抱いてもらったのね。そしたらお父さんが『ごめんな、ごめんな、助けてあげられなくてごめんな』って抱きながらずっと泣いていたの。そして『入院中、妻のことは僕がしっかり支えます。妻のことよろしくお願いします』って言われたの。衝撃だった。自分だってこんなにつらい中なのに父として家族にしっかり向き合っていることに。私にとってもう忘れられない家族なの」と泣いて話してくれた。それから自分にもできることはないかと考え、小さく産まれた赤ちゃんに合う肌着を準備できないかと会議で提案したりしたそうだ。

そして最後に「今度私が命というテーマで中学生にお話しする機会があるのだけど良かったら家族のことお話しさせてもらっていいかな？」と聞かれた。あの時知らなかった家族の思い、看護師さんの思い。私はこんなにたくさんの気持ちに支えられてきたのか。涙が止まらずもう感謝の気持ちであふれた。「私たち家族のことで良ければ」と私は泣きながら笑顔で応えた。

看護職部門
入選

次いつ来るの？

【新潟県】小泉（こいずみ）美香（みか）　36歳

「あんた次いつ来るの？」。彼女は私に聞いた。翌日、彼女は生涯を終えた。

私は30歳で看護師になった。それまでは病院でクラークとして、看護師の彼女と一緒に働いていた。育児をしながら看護学校へ通うと言った私を心配しながらも、待っているからと応援してくれた。

看護師2年目、がんの終末期となった彼女と再会した。私は彼女の担当看護師となった。「あんたが看護師になってここに戻って来るの待ってたよ」。痩（や）せ細った彼女の言葉に涙が出た。私は看護師として彼女に何ができるだろう、彼女のもとへ行くたびそう思っていた。痛み止めを使っても

ら、体をさする、私が彼女にできたことはこのくらいだった。「こんなことしかできなくてごめんね」。私がそう言うと、「こういうことができるのがいい看護。さすったり、話をしたり」「あんたいつもニコニコして、元気がいいから、こっちも元気になれる。私はあんたが来るとホッとする、あんたが来るの待ってるんだよ」と彼女は言った。私はまた彼女の言葉に涙が出た。泣きたかったのはAさんだったのにね。

その日も彼女の体をさすり話をして過ごしていた。勤務の終わりが近付いたため、病室から出ようとするといつも通り彼女は私の心配をした。「疲れていない？仕事つらくない？」と。つらかったのはAさんだったのにね。

その日はその言葉の後に「あんた次いつ来るの？」と続けた。「明日の16時半、また明日ね」と私は答え病室を出た。翌日16時32分、彼女は旅立った。彼女はまた待っていてくれたのだ。待っていてくれてありがとう。最期まで看させてくれてありがとう。

看護師5年目。今も心配しているかな？　大丈夫!!　笑顔と元気を武器に、毎日頑張っているよ。〝元気がもらえる、あんたが来るとホッとする〟、そんな看護師でいられるように。

看護職部門
入選

母と子の時間

【岐阜県】辻川尚子　40歳

「この子に何もしてあげられない、ただ見てるだけ」と両手に納まるほどの小さな子どもを見つめ母親はつぶやいた。母親が分娩後初めて目にした我が子は、呼吸器や点滴につながれ保育器の中にいた。子どもに触れることもできない母親は、保育器の中にいる我が子をただ見つめているだけだった。周りの母親は子どもを抱きしめ「かわいい。かわいい」とはしゃいでいる。母親なのに何もしてあげることができないと、悲痛な訴えだった。思い描いていたバースプランとはかけ離れた現実に、母親は愕然としていた。

母親としての喜びを実感してもらうために私は何ができるのか？　母と子のつながりを実感してもらうために出した答えは、「綿棒に湿らせた母乳をあげてみませんか？」だった。主治医からの許可がおりその旨を母親に告げると、びっくりした顔で私の顔を見た。母親が子どもにしてあげる初めての育児だった。「母乳をあげることができるんですね」。母親の顔が輝いて見えた。

初めて母乳をあげる日、母親は恐る恐る綿棒を子どもの口に近付けた。「あっ！　吸ってる吸ってる。美味しい？」と子どもに声を掛ける母親がいた。いつも悲しそうに保育器の中を見つめていた母親は、我が子が母乳を吸った瞬間に一気に顔がほころび嬉しさをにじませた。

数日後、子どもは、母親の胸に抱かれこの世を去って逝った。たった数日しか生きることができなかった子どもと、たった数日しかその子の母親でいることができなかった母親の、親子としての時間をつくることができた。

看護職部門
入選

爪切り

【長野県】土屋（つちや） 操（みさお） 51歳

10年以上も所属した部署から、気持ち新たに脳外科病棟に異動になった。看護師経験はだいぶ長くなったけれど、脳外科は未知の世界。長くなった看護師経験の中で聞いたことのある言葉の意味が、ベッドサイドにうかがうことで初めて知識と実際の症状と結び付く、そんな状況でいた時に出会ったMさんとの関わりがある。

脳梗塞（こうそく）を発症したMさん。麻痺（まひ）はほとんどなく、運動レベルに問題はなかったが、失語症が残った。周囲の状況は理解できているのに、思い、考え、気持ち……全てが言葉にならない。

「声にならないMさんの言葉を感じたい」。そんな気持ちで訪室した時のこと。「うー」「あー」と涙ぐみ、頭を抱えて俯（うつむ）いてしまうMさんの手に何げなく触れた時、爪が伸びていることに気が付いた。「爪を切りましょうか……ね」。落胆しているMさんに掛ける言葉が見つからず、ただそのままを口にしてみた。驚いた表情で自分の両手をまじまじと見つめていたMさんの爪を切り終えた時、Mさんは私の両手を掴（つか）み、自分のおでこを摺（す）り寄せた。何度も何度も「あー」「あー」と涙ながらに発声を繰り返した。私はMさんからの「ありがとう」を体で感じた。

「爪切りの日」以後、Mさんは私を手招きで呼ぶようになった。言葉での会話はなかったけれど、Mさんと通じ合える時間があった。リハビリ室へは2人で手をつないで歩いた。時間を重ねるうちにときどきMさんは友だちから届いた手紙を私に差し出し、「読んで欲しい」と伝えてくることがあった。私の顔をのぞき込んだり、感慨に耽（ふけ）るあまりあふれる涙を拭（ぬぐ）ったり、時には眼を丸くしながらさまざまな仕草で聞いているMさんを目の当たりにし、私が言葉に対する壁をつくっていたことに気付いた。患者さんが「伝えよう」としているサイン。その何倍もの「聴き取ろう」とするサインを体で患者さんに伝えることが、看て、聴いて、触れて、感じる看護だと思う。

看護職部門
入選

奇跡が起こるかもしれない

【愛媛県】一井美哉子　64歳

ここは急性期病院。

夜8時、退院支援ナースのPHSが鳴る。

「状態は良くないが、どうしても退院したいという方がおられるので、ご本人の話を聴いていただけませんか」と医師の声。

身の引き締まる思いで病棟に上がりA氏のもとへ。

その部屋は、空気清浄機が回り面会謝絶の札がかかっていた。骨髄異形成症候群で治療を受けた85歳のA氏は、検査データ上も厳しい状態で、安静を強いられていた。

A氏は初対面の私を見るや否や、「どうしても帰ってやっておきたいことがある。2～3日でも帰れませんか?」と、祈るような眼差しで問い掛けてきた。

自分の余命を数日と覚悟したA氏の手を取り、私は躊躇なく応えた。

「帰りましょう!」

翌日、ケアマネジャー・訪問看護師・在宅医らに連絡し在宅での支援体制を相談した。

「できる・できない」ではなく「やる」という心意気で、地域の皆とA氏の祈りを引き受けた。

2日後に退院したA氏は、「リハビリをしたい、家中に手すりを付けてくれ」と希望した。やがて、A氏が立位訓練をする動画や厳粛な面持ちで書き物をしている姿が送られてきた。

さらに、選挙に行ってきた、奥さまと気になっていた田畑を車いすで見て回った、運転免許の更新をするか否か迷っているなどの報告がケアマネジャーから入った。

週に1度通院しながら3カ月ほど経ったある朝、夜中の1時頃奥さまと話をして3時に奥さまがふと横を見ると息が止まっていたそうだと、訪問看護師から連絡を受けた。

後日、奥さまがあいさつに来られ「主人は家でやりたかったことをしながら、奇跡が起こるかもしれないと話していた。大黒柱だった主人は、家や土地、葬儀のことなどを書き遺こしてくれたので亡くなった後、家族は何も困ることはなかった。私も主人のように、どんな状態になっても家で看てもらいたい」と話された。

あれから十余年、最期まで家で暮らすことが「あたりまえの幸せ」となる挑戦を今も続けている。

看護職部門
入選

絆創膏

【新潟県】中島 由美子 49歳

保育園の看護師として働いていた頃、私は園児たちから「中島先生」と呼ばれていた。これまで高齢の患者さんが多い病棟で働いてきたので「先生」と呼ばれることや手遊び歌を一緒にする時間は少し恥ずかしい。そして幼児は転んでよくけがをする。傷口を洗い流し水分をふき取り絆創膏を貼ると「先生、ありがとう」と返してくれる笑顔に癒される。

ある日、5歳児の担任から電話があった。「中島先生、リコちゃん（仮名）が教室で転んで足を痛がっているので来てもらえますか?」。

リコちゃんはよく転ぶ子の一人だった。私はウサギ柄エプロンのポケットに絆創膏を入れ、小走りで教室に向かった。

給食を食べ終わり午睡のため布団がずらりと並べられている。リコちゃんは離れた場所で横になっていた。右足のすね周囲を触ると、表情はゆがむが痛いと言わない。腫れもないし内出血もない。しかし、すぐウトウトしてしまう。

（お昼寝しない子なのに、おかしい。いつもと違う）

私は救急車を呼ぶ決断をした。

救急車が到着し状況を伝えると隊員が言った。「転んだくらいで呼んだの? 見たところ足に腫れもないし、きれいな足ですよ」。

「いつもと様子が違うのです。意識も朦朧としていて、ショック状態なのかもしれません」

「えーっ? 眠いだけなんじゃないの? 今、昼寝の時間なんでしょ?」

「いいから早く搬送してください!」

私はよほど怖い顔をしていたのだろう、救急隊の表情が怯んだ。救急隊は優しく声を掛け、足を固定し担架にそっと乗せてくれた。

「中島先生、絆創膏貼って」。小さな手を差し出したリコちゃんの手首に絆創膏を貼ると、笑みを浮かべて再び目を閉じた。私は救急車に同乗し、祈りながらその手を握った。

診断は右下腿の骨折で、ショック状態であった。

時に厳しく立ち向かわなければ、目の前の命を救うことは難しい。このできごとは、看護師としての私の原点となっている。

一般部門
入選

魔法の言葉「かんごしききます」

【山口県】中野淳子　47歳

この冬、今まで感じたことのないほどの腹痛に襲われた。すぐに検査をした結果、虚血性大腸炎と言われ、10日間入院することになった。お産以外初めての入院で、不安しかなかった。

そこで大変だったのが主人。家事、洗濯、子どもの送迎からお弁当作りまで、普段の生活以上に働いてくれた。もちろんほぼ毎日お見舞いに来てくれ、それが一番の薬になった。本当に感謝している。

でも、もっと感謝したいのは看護師さん。朝昼夕に加え夜中まで、忙しなく動き回ってくれた。そして私は、看護師さんの魔法の言葉「かんごしききます」を発見した。

か変わりないですか
んんーと、中野さん
ごご飯全部食べられましたか
し失礼します
き今日担当の○○です
き気分はどうですか
ままた何かあれば言って下さい
すすぐ行きます

これらのすばらしい魔法の言葉を、看護師さんの誰もが発していることに気付いた。それも、ゆっくりと丁寧に優しい口調で。どんな痛みがあっても、魔法の言葉に応えるだけで心穏やかになり、気持ちが安らぐ。こちらも自然と「ありがとうございます」と笑みがこぼれ、目尻が下がるのが自分でもよく分かったほどだ。

多少人によりイントネーションが違うが、それもまた面白い。なぜこの魔法の言葉が浮かんだのか。いや浮かんだのではない。毎日聞いていて耳に心地良かったのだ。隣の患者さんに行かれてもカーテン越しに聞こえるあの声にとても癒された。

10日間はあっという間だった。もう入院したくないが、あの看護師さんの魔法の言葉だけを聞きたいなと思いながら、病院をあとにした。

一般部門
入選

やさしさ

【広島県】悦喜（えき） 未奈子（みなこ） 24歳

受験生真っ只中だった時のこと。試験が3日間ある中で、緊張でいっぱいの初日の試験を終えた帰り道のことだった。一緒に試験を受けた友人2人と電車に乗り、雑談しながら帰っていると、急に私の視界が揺れた。前のめりにたおれて、そこから記憶がない。意識を失ってしまった。

おぼろげに意識が戻ると救急車の中。だれかが私の手を握っていてくれた。見知らぬ若い女性だった。再び意識を失い、次に目覚めたのは病院のベッドだった。母も来ていて、ことの顛末（てんまつ）を説明してもらった。

電車の中で私が意識を失ったあと、車内で非常停止ボタンが押された。友人の1人が、私の携帯電話から母に連絡してくれたらしい。そして、車内にたまたま同乗していた看護師さんが、救急車が到着するまでの間、応急処置をしてくださったそうだ。一緒に救急車に乗ってくださり、手をにぎっていてくれたのは、この方だった。

おぼろげな記憶しか残っていないが、救急車の中でその看護師さんと話したような気がする。「大丈夫ですからね」と声を掛けてくれた。彼女が私服で、コートを着ていたのを覚えている。きっと休日でオフの日だったのだろう。そんな中でも看護師として、私を助けてくれたのだと思うと、申し訳なさや感謝の気持ちやらで胸がいっぱいになった。

病院で意識も戻り、回復したので、試験も次の日から出て受けた。最後までなんとか受け切ることができ、ほっとした。

後日、助けていただいた看護師さんからお手紙が届いた。私が救急車の中で、一緒にいた友人たちや、他の乗客に迷惑をかけてしまったと話していたらしく（意識がなく、私は覚えていない）、そのことを「優しさ」だと書いてあった。私は、彼女こそが勇気と優しさの象徴だと思った。

後に母から、その看護師さんがこの一件で表彰されたと聞いた。

今でも、救急車の中で握っていてくれた手のぬくもりを覚えている。

一般部門 入選

救ってくれ　ありがとう

【栃木県】高橋（たかはし）　久（ひさし）　70歳

「もう少しで駅に着くから、メールして」。家族と落ち合うため駅に向かう車中、助手席の妻に話し掛けた。

令和元年12月初旬のことだった。

「おい、どうした」。声を掛けても返事がない。

妻を見ると、よだれを垂らし、目を開けたまま意識を失っていた。

これは大変だ、4年前の脳梗塞（こうそく）の再発かもしれない。悪夢が頭をよぎる。

車を道路わきに寄せ停車し、妻の体を何度もゆすり、「幸子、幸子、幸子」と大声を掛けても反応がなく依然として意識がない。

急ぎ119番通報し事情を話すと、電話口で「顎（あご）を上げ気道を確保し心臓マッサージをしてください。やり方は……」。頭の中は真っ白、パニック状態。

助手席の座席を倒し、ただ名前を呼びながら、左胸を強くさすることしかできなかった。

どうしよう、どうしよう、心細くなり、半泣き顔になっていた。

とその時、母娘らしい2人が近づき、娘らしき人が「私、看護師です、代わります、大丈夫です」と言ってくれた。

地獄で仏に会ったようだった。

救急車が到着し、「車内に収容します」とのこと。

車を洋品店の駐車場に借りられるようお願いに行き、戻ってくると妻は収容されていた。

車を移動、戻ると「旦那さんも乗ってください」とせかされ同乗。

その時、2人の母娘の姿はなかった。名前を告げず立ち去ったという。

総合病院に搬送され、数時間の診察治療後、「落ち着いています、もう大丈夫です、直後の措置が適切だった」と言われ、自宅近くの病院で治療するために帰宅できた。

当時を思い出すたびに、あの看護師さんに心からのお礼を伝えたいと思い、S新聞社にお願いした。12月中旬、新聞に大きく掲載された。

「救ってくれ　ありがとう」

「通り掛かりの女性看護師、妻に心臓マッサージ」

「栃木の夫婦　名前聞けず」

掲載日の夜、新聞社に連絡を寄せたのは、20代の若き女性看護師だった。

一般部門
入選

心を健康にしてくれた看護学生さんへ

【茨城県】庄田（しょうだ） 恵理（えり） 40歳

「退院が決まりましたよ」

担当してくれた看護学生さんが目に涙をいっぱいにためて教えに来てくれました。

私の息子は事故で重傷を負い、ドクターヘリで病院に運ばれました。集中治療室から小児病棟に移動したある日、看護学校の実習生を受け入れてもらえませんかとお願いされました。当時、私は不安と心配で眠れない日を送っていました。このような状況で実習に来てもらっても迷惑を掛けてしまうのではないかと悩みました。しかしこれも何かのご縁かもしれないと思い、私たちで良ければ協力させてくださいと来ていただくことにしました。

男性の看護学生さんが担当になり、すぐに2人は意気投合して趣味や好きなテレビや音楽の話をしました。なぜ看護師を目指したのかなどたくさんお話ししてくれました。

すると、息子の表情もみるみる明るくなり、ついに笑った顔を見せてくれました。けがは医師が治し、心は看護スタッフが治してくれたんだ！とその時、心にぐっとくるものがありました。

退院が決まった時、感極まって誰よりも先に泣いてくれた看護学生さんに私は救われました。けがを治すだけでなく生きる支えとなってくれたことをとても感謝しています。

回復の喜びを分かちあえるのは家族だけだと思っていましたが、こんなふうに看護してくれた方々とともに喜び合えることを初めて知りました。

今春、息子は第1志望の学校に合格しました。フライトドクターになる夢を叶えるために一生懸命です。

私たちはあの日の看護のことを想うと心が温かくなります。息子が体験した看護経験が将来誰かの役に立つと信じています。

一般部門 入選

おめでとうの本当の意味

【福島県】齋藤（さいとう）絵美（えみ）　43歳

予想もしていなかった悲しみに襲（おそ）われた時涙なんて流れないと身をもって知ったのは、人生で最も幸せな日になるはずだった出産の日。待望の赤ちゃんは大きな病気をいくつも抱えていることが出産直後に分かりました。

先生から事実を告げられても頭は回らず、夢か現実かと抜け殻のようになっていたのを覚えています。

丸一日経過し、ようやくようやく会えた赤ちゃんは保育器の中で「生かされて」いました。テレビでしか見たことのない世界がそこには広がっていて、現実を目にしてようやく置かれている状況を理解した私は初めて、人目をはばかることなく泣き続けました。

その時です。

様子を見ていた助産師さんがこう言ったのです。

「あえて言う。おめでとう」

え？？？　生死の境をさまよっているよ、抱っこさえできないんだよ、なのに「おめでとう」？

頭一杯のはてなマークを助産師さんにつき返すだけの気力もない私はそのまま泣き続けました。

それからすぐ、大学病院へ転院し片手では足らない手術を乗り越え家へ連れて帰れたのは2歳の誕生日が迫っている頃でした。毎日面会をし続け、お腹に生命が宿ることや十月十日一緒にいられること、この世の光を見せてあげること、すべてが当たり前じゃないと知りました。その時、あの助産師さんの「おめでとう」の本当の意味が理解できたのです。数多（あまた）のお産に立ち合っていろいろな経験をされてきたからこその「おめでとう」が伝えたかったことを。

あれから10年、体にいくつもの不自由を抱えながらも毎日楽しく学校に通っている息子。私も柳の木のようにしなやかな強さを身に付けた母親になりました。

そんな今だからこそ、笑顔一杯で言えることがあります。10年前のあの時言えなかった、「おめでとう」に対して……。

「ありがとう」

Nursing now

看護の力で健康な社会を！

Nursing Nowキャンペーンについて

ナイチンゲールの生誕200年である2020年末まで、看護職が持つ可能性を最大限に発揮し、人々の健康向上に貢献するために行動する世界的なキャンペーンが行われています。
英国の議員連盟が活動をスタートさせ、世界保健機関（WHO）と国際看護師協会（ICN）の賛同の下、各地で取り組みが広がっています。
世界では、保健医療制度や人々のニーズが大きく変化しています。
看護職がこの変化に対応し、一層活躍するためには、さまざまな条件や環境を整える必要があります。
日本看護協会は、キャンペーンの参加団体や後援団体とともに、看護職が健康課題への取り組みの中心に立ち、人々の健康の向上に貢献できるよう活動しています。

Nursing Now賞【講評】

ナイチンゲールの生誕200年である2020年末まで、看護職が持つ可能性を最大限に発揮し、人々の健康向上に寄与するために行動するNursing Nowキャンペーンが世界的に行われています。今回、これにちなんで設けられたNursing Now部門では、看護の力で人々の健康に貢献したことを実感した看護実践・経験を募集しました。
Nursing Now賞の受賞作品は、看護師長である作者が、看護の質向上の観点からスタッフと患者との関わりを綴っています。患者へのケアや支援だけでなく、スタッフの育成や病棟管理などの視点を持ち、多面的な成果を記した点が評価されました。
患者を尊重した看護の実践が、スタッフや組織の成果にもつながった、同賞にふさわしい作品です。

Nursing Now賞

セルフケア看護の実践によるハピネス

【東京都】渡邉（わたなべ）美香（みか）　51歳

私は循環器内科病棟の看護師長をしていました。ある一人のナースの看護実践により、スタッフの患者さんを捉える視点が変化しました。

Aさんは60代の一人暮らしの男性で、心不全の急性増悪で緊急入院を繰り返していました。Aさんの入院に対して、スタッフは「また、Aさんが入院してきた」と言っていました。私は、その発言にネガティブな感情が現れているのが気になっていました。そこで、M看護師に、患者の強みに着目したセルフケア能力の評価指標を活用した看護の実践を提案しました。M看護師とAさんが一緒に生活を評価することで、Aさんは病気を理解し、水分・塩分に気を付けているが、受診のタイミングが分からず、重症化してからの入院になっていたことが分かりました。タイミングを話し合った結果、Aさんは風邪かなと思ったら、様子を見ずに受診するようになり、入院となっても軽症のため早期に自宅退院できました。

Aさんを生活者として捉えた寄り添う看護の実践は、いくつかのハピネスを生み出しました。Aさんにとってのハピネスは、入院が短くなったことです。入院による体力の低下が起きず、治療費も抑えられます。看護師にとってのハピネスは、患者さんを捉える視点の変化です。「どのような生活をしていたのかな」と生活者としてのAさんに着目するようになり、患者さんを多面的に捉えて強みを引き出し、入院中から退院後の生活を一緒に考えるようになりました。

看護管理者（私）にとってのハピネスは、患者さんが尊重される職場風土の醸成ができたことです。患者さんとスタッフ双方の変化や成長を実感しました。中でも、M看護師自身が、スタッフの患者を捉える視点の変化に自分の取り組みが影響を及ぼしていると気付く過程は、ダイナミックな様相を呈していました。最後に、病院としても、患者が重症化しないことは入院期間の短縮に繋がり、診療報酬上もベッドの有効活用の点でも利益がありました。

Ｎｕｒｓｉｎｇ Ｎｏｗ賞の受賞作品「セルフケア看護の実践によるハピネス」は、病棟の看護師長である作者の目を通して、慢性疾患の患者と看護師との関わりが、患者のみならず、ほかのスタッフや組織にも良い影響を与えていった様子を描いた作品です。

地域包括ケアシステムが進み、在宅での療養が重視される中、作者が勤める急性期病院でも、入院中から退院後の生活を意識した看護を進めていました。入院は、退院後の地域での生活を考える機会でもあり、看護師は、退院後の生活を見据えて最大限、患者の持っている力を引き出すことが大切です。

作者は、心不全で緊急入院を繰り返していた患者Ａさんに対し、効果的に行動変容を促し、セルフケアを支援することが大事であると考え、ＳＣＡＱ（Ｓｅｌｆ－Ｃａｒｅ Ａｇｅｎｃｙ Ｑｕｅｓｔｉｏｎｎａｚｉｒｅ）という評価指標を使うことを担当の看護師Ｍさんにすすめました。ＳＣＡＱは、患者がふだんの生活や療養上、気を付けている点などについての質問に回答し、各項目をレーダーチャート化して評価する、患者の強みを引き出すことに着目したツールです。

Ａさんが患う心不全は、急性憎悪で入院して状態が悪化すると、入院期間が1カ月に及ぶこともあります。しかし、体調に異変を感じた時点で、できるだけ早く受診してもらうと、1週間ほどで退院できることも多くあります。

ＳＣＡＱを使うことで、患者は自らの状態を知り、病気を抱えながら生活していく上でのヒントが得られます。入院時から看護師が一緒に評価を見ていくことで、退院後の生活を一緒に考え、患者の強みを強化し気付きを促すこともできます。

Ａさんも、ＳＣＡＱを使う中で自らが重症化してから入院していたことに気付き、軽症のうちに対処して、入院期間が短縮化されるという成果が出ました。さらに、Ａさんの自己管理の様子が分かったことで、Ａさんに対する看護の在り方も変わりました。作者は、スタッフとともにＡさんの努力を再評価し、病気が悪化しないための関わりから見えたことをスタッフに問い掛けました。慢性疾患を持つ患者に「指導」するのではなく、一緒に考えるプロセスを大切にしていったのです。

こうした中で、Ｍ看護師にも変化が生まれました。日々の業務を効率的にこなすのではなく、多面的に患者を捉え、患者自身が生活や病状をうまく語れるような場をどのようにつくるかを考えるようになったのです。Ｍ看護師は、看護の力や自らの影響力に気付き、それを部署のスタッフに伝えたいと、カンファレンスを開くまでになりました。

こうした変化には医師も驚き、院内での看護の関わりに対する評価も変わりました。作者も、医師の評価を看護師たちに伝え、作中で「ダイナミックな様相」と表現してＭ看護師の変化や成長をたたえています。作者は看護管理者として、Ｍ看護師が大きな経験を得たことや、スタッフからＡさんに対するネガティブな言葉が消え、患者の尊厳を守る風土が生まれたことが何よりうれしかったといいます。

作中では、慢性疾患で再入院する患

Nursing Now賞【解説】

者を単に自己管理が不十分だったと見るのではなく、ツールをうまく活用して状態を客観的に評価しました。本作品には、患者が自らの状態に気付き、看護師がそれを支えていくという真摯な看護の在り方を大切にしたい、という作者の思いが込められています。

2015年、国連のサミットで採択された持続可能な開発目標（SDGS）の達成に向け、本会が掲げた目標「住民の健康を支える看護モデルの確立」が示すように、今後、療養の中心が地域になっていくとき、看護職が率先して貢献することが求められています。本作品は、急性期病院を舞台としながらも、地域で生活する患者への視点がしっかりと認識され、取り組んでいたことも大きな魅力でした。また、Nursing Nowの活動では、看護のエビデンス収集も目的の一つとなっています。このエピソードのように、普段の看護実践の中で成果があったことについてプロセスやアウトカムを明らかにし、広く共有していくことが期待されます。

「Nursing Now_いま私にできること」キャンペーンを実施中です

新型コロナウイルス感染症という未知のウイルスと戦い、日本の医療を救うためには、国民の皆さまが感染しないこと、これが看護職を含む医療・介護従事者には何よりの励みになり、エールとなります。

日本看護協会は、看護職にエールを送り、国民の皆さまに健康管理への意識を高めてもらうことを目的に、twitter上で下記の＃（ハッシュタグ）キャンペーンを実施しています。

#NursingNow_いま私にできること

国民の皆さまは、感染しないために自身の健康のために取り組んでいることや看護職へのエールを、看護職や医療従事者は、さまざまな現場で日々最善を尽くして取り組んでいる内容や一般の方へのメッセージを、ぜひご投稿ください。

日本の医療を救え

#NursingNow_いま私にできること

看護職へエールを！

©1976, 2020 SANRIO CO., LTD. APPROVAL NO. L610246

看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

www.nurse.or.jp

【主催】 厚生労働省／日本看護協会

【後援】 外務省／文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会
日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会
日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団／全国訪問看護事業協会／全国老人保健施設協会
全国老人福祉施設協議会／日本労働組合総連合会／ささえあい医療人権センター COML

【協賛】 テルモ（株）／東洋羽毛工業（株）／ナガイレーベン（株）／パラマウントベッドホールディングス（株）
ウォータースタンド（株）